同志社よ、その名は一つの目的を意味する

ONE PURPOSE

【同志社人訪問】 株式会社ミリアゴンスタジオ 執行役員 村田（むらた） 千恵子（ちえこ）さんに聞く

巻頭企画［リーダーに訊く］ 蝶理株式会社 代表取締役社長 社長執行役員 迫田（さこだ） 竜之（たつゆき）さん

2026 Autumn | Vol.220



変化の兆しをつかむ
Read the Signals

同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

互いの視点を重ね合い 一国では解けない問いに挑む

ＥＵキャンパスは、二人の学長の関係性から生まれました。テュービンゲン大学のエングラー・前学長と同志社大学の松岡敬・元学長が互いに厚い信頼を寄せていたことが、構想を前へ進める力になったと聞いています。そこから多くの教職員の尽力を得て、現在の形が築かれ、開設から10年近くにわたり、学生と研究者が行き交ってきました。

ＥＵキャンパスの特徴は、教育と研究の両方を担っていることです。教育面で重視しているのは、現地の学生と共に学ぶ機会です。日本について学ぶテュービンゲン大学の学生と机を並べ、授業の一環として行われる各地へのフィールドトリップにも一緒に参加します。学部や学科を問わず応募できるため、専門もドイツへ向かう動機も様々です。背景の異なる学生が、教室の内外で互いの視点を知り、考えを深め合う。そこに、このプログラムの価値があります。

初めは自国の政治や歴史を尋ねられても、なかなか口を開けない学生がいます。現地の学生は遠慮なく問いかけ、授業は議論が中心です。問われ、答えることを繰り返すうちに、帰国する頃には、

検証 #3 「国際主義」の更なる深化 「VISION 2025」その先へ

2025年の創立150周年に向けて取り組んできた『VISION 2025』の成果と課題を検証する連載の第3回は、ドイツ・テュービンゲン大学内に開設された同志社大学初の海外キャンパス「EUキャンパス」を取り上げます。

「同志社大学テュービンゲンEUキャンパス」とは？

『VISION2025』が掲げる「国際主義」の伸展と深化のため、2017年度にドイツ・テュービンゲン大学内に開設された本学初の海外キャンパス。テュービンゲン大学は1477年創立のドイツ屈指の総合大学

EUキャンパスプログラム 世界とつながる修了生の声



EUキャンパスプログラム 第1期生
吉田 菜津希さん
グローバル地域文化学部卒業後、IT企業勤務を経て航空管制官に。現在は成田空港に勤務し、航空機や車両に無線で指示を送っている。

ONE PURPOSE

INDEX

02 検証 「VISION2025」その先へ #3「国際主義」の更なる深化【EUキャンパス】

特集「Read the Signals -変化の兆しをつかむ-」

04 巻頭企画［リーダーに訊く］蝶理株式会社 代表取締役社長 社長執行役員 迫田 竜之さん

08 研究の最前線 社会学部 メディア学科 阿部 康人准教授

10 突破する学生たち 同志社大学広告研究会add's

12 DOSHISHA DNA 株式会社JDSC 執行役員 城戸崎 由美香さん

INFORMATION

14 ①今年度就職活動をした先輩からのメッセージ

15 来年度就職を目指す皆さんへ

16 ②同志社校友会

17 クリスマス・イルミネーション点灯式／同志社大学×京田辺市 ふるさと納税スタート／第151回 同志社EVE

18 ③ゼミで学ぶ 魅力を語る

20 ④本学教員の執筆図書紹介

21 同志社人訪問 株式会社ミリアゴンスタジオ 執行役員 村田 千恵子さん

24 My Purpose 挑戦する人 上野 結来さん（スポーツ健康科学部4年次生） 高橋 理央さん（商学部4年次生）

※本記事に掲載している内容、所属、役職、学年等は取材時のものです。

お知らせ

「ONE PURPOSE」は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションを図ることを目的として発行しています。同志社大学の最新情報は随時ホームページでお知らせしております。ぜひご覧ください。

▶ https://www.doshisha.ac.jp/

卒業生の住所変更、発送停止を希望される場合の連絡先は以下にお願いします。

校友課
TEL：075-251-3009
MAIL：ji-koyu@mail.doshisha.ac.jp



EUキャンパス支援室長

Regine DIETH 准教授

自分の考えを言葉にできるようになっていきます。

研究交流も、重要な柱です。毎年テュービンゲン大学で開催される「Doshisha Week」では、若手研究者が英語で発表し、テュービンゲン大学の研究者と議論、研究室を訪れるなどの交流を行っています。

現地オフィスには、学生の支援に加え、自らの研究を兼ねるEUキャンパスフェローも常駐しています。人の往来は着実に増えました。ここで生まれたつながりが共同研究として実を結ぶことが、これからの課題です。

国際主義という言葉が意味するものが、変わってきたと感じています。かつては、視野を広げ、異文化を理解することで自国の文化を知ることでした。現在は、気候変動や環境問題、民主主義の後退など、一国では解けない課題に向き合う力が求められています。背景の異なる人と対話し、互いの経験を結び付けて新しい考えを生み出し、地球規模で物事を考えられる人が、このキャンパスから育っていくことを願っています。

で、同志社大学とは1990年の学生交換協定締結以来、交流を重ねてきた。2019年度に初の教育事業「EUキャンパスプログラム」を実施し、10名を派遣。2020年度からは春・秋の2プログラム体制となり、現在はそれぞれ約15名を5カ月間派遣している。











テュービンゲンで学んだ「ものさしは一つではない」

管制の無線では、こちらが出した指示を必ず復唱して返してきます。合っていればそのまま進み、違っていればその場で正す。相手の多くは世界各国のパイロットで、やり取りは英語です。互いに母国語ではないことも少なくありません。同じ単語でも、どこまでの意味を含むのかが少しずつ違う。だから私は、正しい英語を話すことよりも、相手にどう伝わったかを確かめることを大切にしています。

自分の当たり前が、相手の当たり前とは限らない。その意識をより強くしたのは、EUキャンパスプログラムに参加してからだと思います。

派遣留学に必要な語学スコアが間に合わず思案していた時、ドイツ語を教わっていた先生から「新しいプログラムができる」と聞きました。4カ月間(※)、語学や文化を学びにドイツへ行ける。望んでいた条件が、そのまま揃っていました。単位が認められることに加え、国際課の方が同行されるという安心感もあり、参加を決めました。

現地の授業で聞いた「日本人は曖昧さに弱い」という話が、今も印象に残っています。自然災害の多い土地では、備えられるものは先に備えておきたい。だから、日本人は決まらないままの状態を落ち着かなく感じるのだ、と。私の感覚は、育った土地と結び付いている。育つ場所が違えば、当たり前も変わる。それは世界の標準ではなく、数あるものさしの一つだと気付かされました。外から見れば、私たちもまた説明される側にいる。そして、説明された通りの「日本人」でいる必要もないのだと思いました。

テュービンゲンで得たのは語学力と、〝ものさしは一つではない〟という感覚。管制塔に立つ今も、相手には違う見え方があるかもしれないと考える。その習慣は、あの4カ月からつながっているように思います。

※現在は約5カ月間のプログラムとして実施されています。



蝶理株式会社　代表取締役社長 社長執行役員

迫田（さこだ） 竜之（たつゆき）さん

1964年、大阪府生まれ。同志社大学経済学部を卒業後、89年蝶理株式会社に入社。管理系を軸に米ニューヨーク現地法人で7年、繊維事業の企画部門7年、国内化学品事業会社への出向2年を経験。2018年6月執行役員に就任、20年6月ミヤコ化学株式会社代表取締役社長・社長執行役員、22年6月に本社へ戻り取締役常務執行役員 経営政策本部長兼中国総代表兼薬事総合管理室担当、24年6月より現職。「苦楽を共にした大学の軟式テニスの同期生とは、今も頻繁に飲み合う仲です」

やり抜く力で時代の先を読み世界と日本をつなぐ

国際情勢の不安定さも相まって、今は先が見通しにくい時代だ。そんな中、繊維・化学品の複合型専門商社「蝶理」は、今年4月に発表した新中期経営計画で「領域の拡大」を宣言。海外市場に軸足を置いた攻めの姿勢を鮮明にした。社長の迫田竜之さんは、「順調に進んでいたことが壁に突き当たるなんて当たり前。諦めず、手法を変えるなどして『やり抜く力』が必要です。トレンドをつかむのに何より大事なのは、不確実性に耐えて前進する実行力ですから」と語る。

舞台は世界 中国・ASEANに注目

蝶理の原点は、京都・西陣で1861年に創業した生糸問屋だ。1926年に人絹（レーヨン）糸の取り扱いを始め、37年には国内の人絹糸生産量の約30％を取り扱うまでに成長して繊維専門商社としての基盤を確立した。戦後は石油化学の将来性に着目し、56年から化学品の取り扱いを開始。繊維と化学品の2分野を事業の柱とし、専門性を高め、ネットワークを広げてきた。

今年で創立165年を迎えた歩みの中では、2度の大戦、オイルショック、バブル期の事業拡大に伴う損失発生など、経営危機にも直面した。主に管理・企画部門を担当してきた迫田さん自身、当事者として対応に当たってきた。



変化の兆しをつかむ

Read the Signals

テクノロジーの進化や価値観の多様化などを背景に、現代社会はめまぐるしいスピードで変化しています。「全員が同じものを追う」時代から、個別最適化や持続可能性、体験を重視する傾向が強まり、顕在化していないニーズをいち早く把握し、社会の変化を予測しながら対応することが重要になっています。

今号は「Read the Signals －変化の兆しをつかむ－」をテーマに、時代の流れをつかみ、社会のニーズを先取りして道を切り拓いている本学の学生や教員、校友を特集しました。

「社会の変化に対応するには、主観を排して自社の強みと弱みを冷静に分析することが大切です。繊維や化学品に対する高い専門性と広い知見などの強みを一層磨き、技術や販路などで欠けている部分はM&Aで補う。『選択と集中』を徹底することで経営を立て直し、財務基盤を強化することができました」

中国、ASEANを中心に海外30拠点のグローバルネットワークを構築している蝶理。2026～28年度を対象とする中期経営計画では、これまでメインとしていた日本市場でのビジネスに加え、中国・ASEANを基点とした「海外から海外へ」のビジネス強化を図る。

「市場の成長性を考えると、今後は海外市場での成長機会をさらに取り込んでいく必要があります。我々がもっと伸びていくには、グローバルな市場、特に新興国に向き合っていく必要がある。高品質と信頼性に裏打ちされた日本企業の強みと併せ、巨大な市場を持ち技術革新のスピードも速いという中国企業の強みを、アジア、中東、ヨーロッパへと展開できる余地はあると考えています」

輸出規制などリスクがささやかれがちな中国ビジネスだが、蝶理は1961年に中国から友好商社第1号に指定された日中貿易のパイオニア。現在、中華圏に15か所の拠点を持ち、約250名の社員が働いている。上海は東京、大阪に次ぐ拠点へと成長している。

ニーズを先読み 商品開発にも力

取扱商材に目を向けると、繊維事業では、糸・生地・資材等の素材から、スポーツ用途・ファッション分野にわたる様々



取扱商材が並ぶサンプル倉庫。素材から用途まで一気通貫に提案できるのが蝶理の強み

な縫製品に至るまで幅広く提案。車のカーシートでは、糸の段階で約40％、生地の段階では約30％の国内シェアを占める。繊維産地として400年以上の歴史を持ち、合成繊維の生産・加工を強みとする北陸産地（福井県、石川県、富山県）との結びつきも強く、伝統技法を生かした高付加価値糸「SPX」を共同で開発。また、今年6月に開催した展示会では、羽毛の代替品として開発した中綿素材「TORIKUMO」をアピール。繊維の長い不織布を蝶理が開発した専用機で折り重ねることで特有の凹凸構造を生み、暖かさと軽量性の両立を実現させたといい、「製造体制を整え、既に一部は商材として販売しています。息長く育てていけるよう、今は取引先にご紹介しているところです」と期待を寄せる。

一方で、衣類の大量生産・大量廃棄が環境負荷をもたらしているという繊維業界全体の課題解決にも目を向け、取引先と協働。再生材の使用や環境負荷を低減した製造工程等、サプライチェーン全体のサステナブル化を目指す「ブルーチェーン」プロジェクトにも力を入れている。



長繊維の不織布を折り重ねることで、特有の凹凸構造を生み出す新しい中綿素材である「TORIKUMO」

化学品事業は、60年以上積み重ねてきた実績をもとに、メーカーの技術的課題やニーズを聞き取り、世界各国の受委託先・仕入れ先と連携してカスタマイズした原料をOEMで開発・供給することも行うなど、大手商社が手掛けないニッチな分野に強みを持つ。また、SDGs達成の鍵としてバイオ素材に注目。中国の化学品メーカー「華峰集団」が米企業「デュポン」のバイオ材料事業を買収して設立した子会社と昨年、戦略提携契約を締結した。「華峰集団はいまや世界最大規模の化学品メーカーですが、当社は創業時から取引をしています。今回、バイオ系子会社と提携したことで、同社が開発・製造する革新的なバイオベース素材を、日本やアジアでの代理店として販売しています。今はまだ開発段階の商材ですが、バイオベース市場は今後も拡大していくと見ており、伸ばしていくべき事業だと考えています」

人材こそ宝
時代に合わせ育成を強化

ニーズをつかみ、モノとモノ、企業と企業、また国と国とをつなぐ商社にとって、人材の育成は最重点事項だ。蝶理では今後、積極的に若手に海外駐在を経験させる方針だ。「はじめは何の成果もあげられませんよ。けれども文化にしろ商習慣にしろ、日本を飛び出すことで新しく見えてくるものがあり、その経験は必ず成長につながります」



2024年9月に移転した大阪本社の新オフィス。交流が自然と生まれるレイアウト



個の力を伸ばすことと同時に取り組むのが、業務の標準化だ。デジタル技術を全社横断的に導入し、業務の効率化・標準化、経営管理の高度化や生産性向上を推進している。「商社というのは、どうしても自分の世界で仕事をやりがちです。しかしそれによって仕事が属人化すると、次世代につないでいけない。属人化の排除は、経営政策本部長時代から取り組んできたテーマです」

この4月には、インナーブランディング推進委員会とダイバーシティー&インクルージョン推進委員会を設置した。

「企業の理念やビジョンを従業員に共有し、理解や共感を深めてもらうための社内向け活動であるインナーブランディングも、多様な人材の活用を目指すダイバーシティーも、いずれも会社として非常に大きな課題です。今までは管理部門が発信していたのですが、現場が自分ごと化できず、浸透に限界がありました。新たに設置した委員会では、繊維事業と化学品事業それぞれの本部長を推進委員長にすえ、メンバーは異なる事業の事業部長を組ませることで、他人事にはできない、全社で連携する体制にし、現在活発に意見交換してもらっています。幸せに働ける職場環境を提供することで、多様な社員がそれぞれの得意分野で力を発揮し、会社としてそれを伸ばせるようになればベストだと考えています」

世界で活躍する気概を

海外駐在員を志望して蝶理に入社するも、最初の7年間は財務担当として、借入金返済のため金融機関との取引に奔走した。念願かなって赴任した米ニューヨークの「蝶理アメリカ」は、当時最大規模の輸出入拠点だった。社員50人中15人ほどいた駐在員の中では最も若手で、「全ての雑用が私のところに来るという感じでした」。7年後に帰国してからは経営企画や財務経理部門を渡り歩き、2010年にはバングラデシュの首都ダッカの駐在員事務所の開設に関与。アメリカ、国内の子会社に続き、社長職は今が3度目だ。「非常にいい機会を頂戴しながら、刺激がある人生を生きているなと思います」

ハードな日々を支えた一つに、大学時代の経験が生きていると感じている。

「中学、高校と軟式テニス部だったので、同志社大学でも迷わず大学公認の軟式テニス同好会に入りました。関関同立の4大学に加え、慶応・早稲田など関東の6大学とも交流戦があって、毎日、体力と気力を限界ぎりぎりまで追い込むような、非常に熱心な活動をしていました」

練習が終われば連れ立って食堂で大盛りメニューを食べ、アルバイト先も、先輩から後輩へ代々受け継がれる居酒屋に交代で入った。厳しさと楽しさに満ちた濃密な4年間のおかげで、今に至るまで固い絆で結ばれた友人たちとの関係性とその後の人生の礎となる強い精神力を得られたと思っている。

「今は時代が変わり、限界まで追い込むようなやり方は部活でも仕事でも見られなくなってきました。もちろん、それでいい。ただ、学生のみなさんにはやはり、世界での活躍を志向する気概を持ってほしい。そのためにも同志社大学には、教育や制度面を含め、学生が世界に目を向ける機運をしっかり醸成してもらえればと思っています」

国内はもとより世界中の様々な国から学生や教員が集まる同志社大学は、ゼミでも部活やサークル、また学外でも、交流の機会がふんだんにある。

「学生時代にしかできない経験をたくさん積んで、いろいろな人とコミュニケーションをとってほしい。それが可能性を広げ、時流に流されない自分をつくり、ひいては日本を強くすることにつながるはずです」





研究の最前線
Forefront of research

トレンドを裏から見る視点で社会の変化を考察する

社会学部 メディア学科　阿部 康人（あべ やすひと）准教授

2003年、同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒。05年、同志社大学大学院文学研究科新聞学専攻博士前期課程修了。15年、南カリフォルニア大学大学院アネンバーグスクールでコミュニケーション学博士を取得。22年から現職。同志社大学サイエンスコミュニケーション研究センター副センター長。福島第一原子力発電所事故以降、市民による放射線測定データが持つ社会的意義について研究を続けている。

メディアの特性を知ることがトレンドをつかむ第一歩

テレビや新聞といったマスメディアから動画共有サイト、SNSなどインターネットを介したソーシャルメディアまで、多様なメディアが人間の思考や行動とどう関わり、社会のあり方をどのように形づくっていくかを探求するのが、社会学部の阿部康人准教授が専門とするメディア・コミュニケーション学だ。

「人間は、さまざまなメディアをつくり、それを利用してコミュニケーションをしてきました。メディア・コミュニケーション学は、人間、そして人間がつくりあげてきた社会をより良く理解するための最適なレンズの一つなんです」

生成AIの登場でメディアはますます多様化しているが、マスメディアが果たす役割は依然として大きいと考えている。特に、社会へ今後浸透していくことが予想される新しい概念を伝えることについては、不特定多数に情報を伝達できるマスメディアの発信力は大きな強みだ。

その一例として、ハリス理化学研究所の桝太一助教を中心に2人で取り組んだのが、新しい科学用語「ブルーカーボン」（※）を、テレビや新聞がどのように報道しているかという研究だった。調査では、この新用語を環境問題と関連づけ、「SDGsの切り札」のように取り上げて報じる例が多く見られた。ブルーカーボンの重要性が強調される一方で、その科学的根拠やリスク、課題についてはほとんど触れられていないことに懸念を覚えた。

「メディアは新しい科学的な概念などを紹介する際、その社会的な意義や可能性を強調して伝えることがあります。それ自体が問題なのではありません。ただ、その肯定的な

側面だけでなく、科学的根拠や不確実性、リスク、課題についても検証し、伝えていく必要があります。だからこそ、メディアが科学的な情報をどのように社会に伝えているのかを、さまざまな角度から検証することが重要だと考えています」

※ブルーカーボン：海草藻場やマングローブ、塩性湿地などの沿岸・海洋生態系が取り込んだ二酸化炭素に由来し、生態系や海底の堆積物などに貯留される炭素のこと

実体験を大切に幅広い視野を持とう

現在取り組んでいる「科学とメディア・コミュニケーション学」という研究テーマ。その問題意識につながる経験の一つが、中学3年生の頃にあったという。

「私の母は、普段から物事を批判的に見る人でした。けれど、がんを患ったとき、テレビで『どんな病気も治す』と紹介されていた人物の治療法に希望を見いだしたことがありました。振り返ってみると、この経験は、科学についてメディアが何を、どのように伝えるのかという現在の問題意識にも、どこかでつながっているように思います」



大学1年次生の夏休み、中国語のクラスで一緒だった友人と中国・杭州の西湖へ。「学生の皆さんにも、ぜひたくさん旅をしてほしいと思います」

学部時代から、メディアは市民社会において極めて重要な役割を担っていると考えていた。だからこそ、その重要性に見合った社会的責任を十分に果たしているのだろうか、という問題意識を持っていた。大学院でコミュニケーション学を学ぶ中で、そうした問題意識を持ちつつも、メディアを一面的に評価するのではなく、情報がどのようにつくられ、伝えられ、社会の中で受け止められるのかを、より多面的に考えるようになった。

そんな体験から、自身のゼミではコミュニケーションに比重を置き、文献を基にディスカッションをさせたり、互いの研究内容について意見を交わさせたりと積極的に学生同士の対話を促している。メディアとの向き合い方に一つの正解はない。だからこそ、対話を通じて多様なものの見方に触れ、共有知をつくりながら、より良いメディアとの向き合い方を模索してほしいと考えている。

「スマートフォンで何でも簡単に検索できる時代だからこそ、生身で対話し、街に出て五感で感じる体験や、そこで得られる偶然の気づきを大切にしてほしい。そうすることで視野は広がり、社会の変化やトレンドにも、より敏感に気づけるようになると思います」

学生の本分を尽くし成長を伴う学びを深めて

トレンドが目まぐるしくかわる世の中だからこそ、流されることなく変化の兆しを見極めるためには、自分自身が社会を見る上での「軸」を持つことが大切だと考えている。

「私自身は目に見えるトレンドよりも、それにより失われたものに着目しています。例えば、今はショート動画がはやっていますよね。では我々は、それによって何を失ったのか。我々が当たり前にしていた何を、社会は『不要』としたのか。いわばトレンドを裏から見るような視点で今の時代や若者文化を考えてみることを大切にしています」

自分だけの確たる視点を持てるよう、学生たちには成長を伴う学びを積み重ねてほしいとエールを送る。一つの物差しにあてはめられることなく、教員も学生も自身の関心があるテーマを定め、腰を据えて研究に取り組める自由な風土が同志社大学にあることは、自身が日々実感している。

「今の時代は、AIを使えばさまざまなことを比較的簡単にこなすことができます。ただ、それだけでは自分自身の成長につながる学びは得にくいのではないかと考えています。第2代学長ラーネッド先生がおっしゃっていた『生きるために学び、学ぶために生きよ』という言葉のとおり、学ぶことこそが学生の本分です。『成長なき成功』を重ねるのではなく、失敗や間違いを恐れず、時間をかけて自分で考え、試行錯誤する経験を積み重ねてほしい。そうした経験が、社会に出てから自ら考え、行動していくための基礎体力になるはずです。人や書物との対話やさまざまな経験から学び、自分だけの強みを身につけてください」



活気あるゼミの様子。「学生たちは私の存在を忘れてしゃべっています（笑）」

大学生はトレンド牽引世代 学生ならではの視点と 実践力で社会とつながる

突破する Break through 学生たち

同志社大学広告研究会add's は、「広告を研究する」にとどまらない、実践力が魅力のサークルだ。活動を通じて知見を広げたメンバーが企画会議を重ねて、取材や撮影を行い、原稿を書き、デザインをしてフリーペーパーを発行する。またある時は、企業にブランドイメージの刷新を働きかける。学生ならではの視点を大切にしながら、サークルのスローガン「きのうより、おもしろい、きょうを。」を目指す。

同志社大学広告研究会add's

1999年創部。同志社大学や同志社女子大学の学生らを中心に、現在183人が所属している。マーケティング、デザイン、コラボレーションが活動の3本柱。マーケティングとデザインは、今出川キャンパスで勉強会を開催し、企業事例の研究や編集ソフトの技術習得などを行う。勉強会で得た知識のアウトプットの場として、フリーペーパー「yummy！」「イマ＊イチ」を発行。コラボレーションとしては、マーケティングコンペの開催や企業と連携したプロジェクトを実行する。



2025年度会計。小さい時からCMが好きで入部。「大学のサークルに不安を抱いていたんですが、新勧に行ったら先輩たちがいい人ばかり。いい意味で裏切られました」

2026年度会計。渋谷ヒカリエの「わたしの好きなものでできている。」という広告が好き。「ケーキやコスメが積み重なり建物になる様子と、コピーがマッチしていて素敵です」

今年6月から第29代会長を務める。先代幹部との面接を経て、グループLINEに所信表明動画を公開、全体からの信任を得た。「みんなとコミュニケーションを取って運営していきたい」

2026年度書記。哲学科在籍。哲学で培われる論理的思考力が、マーケティングに生かされると感じている。「当たり前という前提を取り払い、思考を組み立てることが共通していると思います」

どのようなフリーペーパーを発行しているのでしょうか

柴山：「日常をもっとおいしく」をコンセプトに京都の学生を対象に飲食店を紹介する「yummy!」と、「今出川でいちばんの地域情報誌」をテーマに大学と地域を結ぶ冊子「イマ*イチ」を発行しています。企画の立案から取材、写真撮影、誌面のレイアウトまで行っています。

井野口：「yummy!」は年2回、「イマ*イチ」は年3回発行しています。毎号のテーマは季節感を意識して、僕たち学生が興味を持っていることを取り入れています。

伊東：みんな編集未経験で入ってきますが、先輩たちが丁寧に教えてくれます。私はデザインに興味があり、「yummy!」で表紙を担当しました。「散歩」がテーマだったので、ピクニック要素をレイアウトに取り込み、ぱっと見てテーマが分かるよう工夫しました。

木村：私は最近、「yummy!」の取材でかき氷のお店の原稿をまとめました。文章を書くのは得意な方だったんですが、味覚や店の雰囲気をどう表現したら読者に伝わるのか悩みました。



add'sが手がけた広告やフリーペーパーなど

コラボレーション活動とは、どんなものですか

井野口：企業や自治体と連携したプロジェクトです。最近では、同志社オリジナルウォーター「最襄級（さいじょうきゅう）」のラベルを刷新しました。ラベルデザインを協議する中で、「大学生は友だち作りに悩むなど、意外と孤独なのでは」という仮説を立てました。「最襄級」は海洋深層水が使われているのですが、そんな大学生たちの背中を海の水がそっと押すというイメージをラベルに込めています。

柴山：認知度を高めるため、生協前で七夕前後の期間に、願い事を書いてもらうイベントを企画しました。新旧の「最襄級」を置いて違いを見てもらったり、新ラベルのイメージ調査を行ったりしました。

井野口：単にラベルを変えるだけでなく、消費者の心理を探り、それに合った商品を届けることはマーケティングに通じるものがあり、いい経験になりました。友だちが「最襄級」を買っているのを見たり、「良くなったね」と声をかけてもらったりすると、取り組んだ過程に間違いがなかったと自信を持てます。

柴山：その他にも、協賛企業から課題をいただき、その解決方法を競い合う「関西マーケティングコンペ」の開催や、京都市交通局と連携した活動などがあります。フリーペーパーの発行だけだとデザインに活動が偏ってしまいますが、コンペなどを通じマーケティングの実践の場を設けるなどバランスの良い活動となっています。

トレンドをつかむために意識していることは何ですか

井野口：読者や消費者の求めるものは、社会情勢と深くつながっていると感じています。今、何が起きていて、こういう気持ちの人が多いのではないかや、広い目で社会を見るということを意識しています。

木村：大学生がトレンドの主流にいる世代であることが多いと思います。まず仮説を立て、トレンドと照らし合わせ、友だちと話し合う中で、その仮説が合っているかを探ります。主観的な視点からこそ、自分の色が出たPRやマーケティングができるのではと思っています。

柴山：話題になっているものが、どの世代に需要があって流行しているのかを意識して考えるようにしています。特にadd'sでは、企業など外部との関わりが多く、学生ならではの視点を求められるので、この世代でしか持てない視点を大切にしています。

伊東：add'sって、会議がとても多いんです。会議して、会議して、実際にやる、みたいな形なので、雑談や話からそれたところにアイデアのかけらが落ちているのではと、気になったことは必ず拾うようにしています。

同志社大学での学びと魅力を教えてください

柴山：高校時代からマーケティングの勉強をしたいと思っていたので、商学部が有名な同志社大学に進学しました。授業ではプレゼンテーションの機会が多く、人前で話すことに抵抗がなくなりました。周りに意欲的な人が多いので、自分を高めるモチベーションになっています。

木村：私も人との出会いに魅力を感じています。最近、AIにも関心を持ち始めたので、AIのコミュニティーに参加し始めました。新しい関わりがどんどん増えていくのがうれしいです。

伊東：同志社大学の魅力は何といっても立地の良さ（笑）！ 今出川キャンパスは地下鉄の駅直結で、時間を有効に活用できます。

井野口：マーケティングを学びたくて同志社大学に進学したので、ゼミでもサークルでも、関心を持っていることを一貫して追求できています。add'sでは勉強会の講師を務める機会も増えたので、自分なりに得た知識を下級生に還元し、活動の質を高めていきたいと思っています。



最先端の手法やテクノロジーを知り、学び自身の気づきと考察で小さな変化を見逃さない

株式会社JDSC
執行役員
城戸崎（きどさき） 由美香（ゆみか）さん

2003年に同志社大学商学部を卒業後、P&G(現・P&Gジャパン合同会社)に入社。石鹸や紙おむつ、化粧品などのブランドマネジメントやデジタルマーケティングを担当。その後転職し、外資系医薬品メーカーのアストラゼネカ株式会社、美容医療関連企業のアラガン・ジャパン株式会社(現・アッヴィ合同会社)で、新薬のローンチや新規事業の立ち上げを経験。19年に株式会社JDSCに参画し、22年に同社初の女性執行役員に就任。

私たちの周りでは日々、新しい技術やサービスが登場する。その変化をいち早く捉え、活躍の場を広げてきたJDSCの城戸崎由美香さん。大学在学中にマーケティングと出合い、多様な業種でキャリアを重ねてきた。マーケターの目から見る、社会の変化の兆しをつかむ力とは。

同志社大学でマーケティングと出合う

小学生の頃から、同じ物でも見せ方を変えるだけで、その価値が変わることに興味を持っていたという城戸崎さん。「古びたお店でも、『入り口の伸び放題の木の枝を切ってきれいにしたら、もっと人が入るのに』とか、手作りクッキーも『きれいにラッピングをしてあげたら友だちが喜ぶな』とか、どう見せるかで受け手の感じ方、そしてそのものの価値が大きく変わることに興味がありました」と振り返る。同志社大学入学後、1年次生のときに受けた内野雅之先生の授業で、それまで漠然と関心を持っていた「ものの見せ方」が、実はマーケティングに繋がると気づき、感動した。内野ゼミに入り、マーケティング理論を基礎から学んだ。

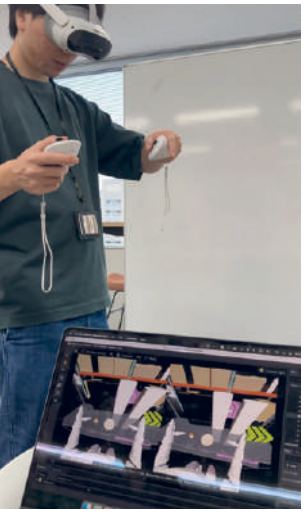
3年次生のとき、内野ゼミに紹介のあった消費財メーカーP&Gのワークショップへの参加が、城戸崎さんの人生を決定づける。「どうすれば製品が売れるかを考えるケーススタディーに取り組みました。自社の強みは何だろう、消費者とどうコミュニケーションを取れば売れるだろうなど、考えること自体が楽しくて。これが仕事になるなら、なんて素敵だろうと思いました」。この経験をきっかけに、当時としては珍しいマーケティング部を設置し、部門採用を行っていた同社に入社。マーケティング専門職としてのキャリアをスタートした。

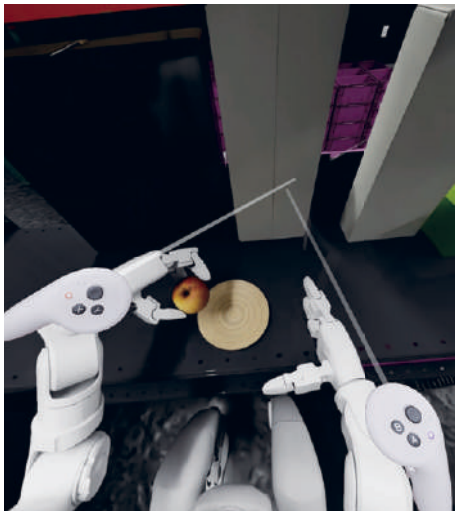
専門性を高める中で社会の変化を感じ取りキャリアを形成

同社では、後に日本のマーケティング界を牽引する人材が多数活躍しており、そうした刺激を与えてくれる先達によ

る勉強会に積極的に参加し、トレンドや社会の変化を捉える力を磨いた。世界最先端の手法を学び、市場で実践する中で、消費者の情報収集手段がテレビからＳＮＳに移行しつつあることに気づき、デジタルマーケティングを専門に扱う部門に異動。そして、消費財業界以外でもマーケティングの転用が広がっていくことを感じ、これまで培ってきた知見を他業界で生かしたいと考えて、外資系製薬会社に転職し、マーケターとして新薬の上市や新規事業の立ち上げを経てキャリアを広げた。そして２０１９年、Ｐ＆Ｇ時代の同僚が設立した、データサイエンスとＡＩで社会課題の解決を目指すＪＤＳＣ社への参画の打診を受ける。

「今まで携わった業界とは全く違うので役に立てると思えず、最初は断りました。でも、ＪＤＳＣという会社を世の中にどう見せるかを考えるコーポレートマーケティングをしてほしいと言われ、それならキャリアの延長線上にあると思い、入社を決めました。本気で世の中を変えたいと考え、上場をめざして集まった熱意あるメンバーも決め手でしたね」





実用化に向けて多様で効率的なデータ収集が必要なフィジカルAIの模倣学習用に
物理シミュレータと連携したVRデバイス画面（右）とJDSC社員がロボット遠隔操作を行う様子（左）

会社のロゴ制作やウェブサイト開設といった得意分野はもちろん、一般消費者向けの製品を持たない同社をメディアに取り上げてもらうため、技術力の訴求としてハッカソンやピッチでの受賞や、社長自身の講演でビジョンを語ってもらい、企業価値の浸透に努めた。一方、草創期ということで、マーケティングに専念するわけにもいかず顧客案件にも参画。担当した大手予備校では、アダプティブラーニング教材の開発のために、まずは紙ベースだった教材をデジタル化。教材へのＡＩ活用のみならず、タブレット学習により、生徒の学習データをリアルタイムで可視化することで、教師が理解度に応じた授業を行うといった教育そのもののＤＸに取り組んだ。「マーケティングだけではない仕事をすることになり、それが面白いと思えたことが新鮮でした。ＪＤＳＣに入らなければ気づけなかったことですね」

「観察眼」を大切に感受性が豊かな大学時代を大切に過ごしてほしい

現在は、「ＵＰＧＲＡＤＥ　ＪＡＰＡＮ（アップグレードジャパン）」を企業ミッションとして掲げ、民間だけでなく官公庁領域でのプロジェクトも進めている。デジタル庁が推進する事業者向け行政手続の効率化分野における取り組みを２０２４年より受託し、難解な手続の負担を減らすことで、日本全体の生産性向上に挑んでいる。

「これからはＡＩ活用が当たり前という時代で、ＡＩを活用している企業や人が生き残れなくなる時代がくるでしょう。ただ、すべてをＡＩに頼るのではなく、どの部分をＡＩに任せるか、それを自分で考え、ＡＩが出した答えを判断する力が求められます」と変化の時代に生きる心構えを語る。



そんな城戸崎さんが考える、社会の変化の兆しをつかむ上で大切なことは「観察眼」。「見過ごさず、変化に気づく力が必要。何事も気づかないと、自分の態度変容を起こせません。また、何かサービスや広告を見たときに、消費者として見るのではなく、これはどういうビジネスモデルで、どういう意図で作られたのかなど、裏側を考えることも大切です」

その上で、学生たちには「漫然と毎日を過ごさず、何かを学ぼうと過ごしてほしい」と期待する。「大学時代は時間の使い方の自由度が高く、この時期にどう時間を使うのかが、その後の人生に大きく関わります。学問でも人でも、出会ったものすべてが将来自分の糧となるでしょう。私自身、同志社大学での学びがその後のキャリアに繋がり、大学時代の出会いに感謝しています。就職そのものに直結しなくても、その後の人生において『ここに繋がるのか！』と驚く時はきっと来る。学生時代は感受性が豊かで、あらゆることを吸収できるので、その機会を多いに生かしてほしいですね」

＼今年度就職活動をした先輩からのメッセージ／

（「2026年度 就職活動に関するアンケート」から）

神学部
自分1人でやらず、周りに頼ること。

文学部
1人で闇雲に就職活動をせずに、色々な人（先輩やキャリアセンター）に助けてもらうこと。SPIの対策はコツコツやること。面接は、社員さんとの会話だと思って堅くなりすぎない。

社会学部
「どの企業に行きたいか」ではなく、「自分が将来的に何を成し遂げたいか、どんな人間になりたいか」を主軸に考え、そのためにどの企業に行くべきかを選択するという考え方を持つことが大切だと思う。そのような視点を持つことが、結果的に企業側に評価してもらえることにも繋がる。

法学部
最終的には1社だけの内定をもらえればいいので、色んな企業に不採用の通知をもらっても、ただ相性が合わないと思って、落ち込む必要はないです。

法学部
できるだけ早く就活を始める。初めは業界や職種を絞りすぎず、幅広く見る。

経済学部
自己分析をしっかりして、将来何をしたいか、自分は何が得意なのかをはっきりさせておくと、面接選考や企業選びがスムーズにいく。

商学部
就活は大変な時期もありますが、1人で抱え込みすぎず周りの力を借りましょう。きっと自分にはない視点や考え方を得ることができ、視野が広がります。

商学部
どんなイベントでも気を抜かずに、積極的に行動すること。1人で悩まずに、信頼できる相手に相談すること。SNSの情報に惑わされないこと。

政策学部
就活はとにかく早めに動くことが大切だと思います！いきなり1日に何時間もする必要はないので、気になる企業を毎日数分程度チェックしてみるなど小さいことから始め、とにかく毎日コツコツと積み上げていくことをお勧めします。

政策学部
様々な業界の対面のインターンシップに参加することで自分の適性も分かってくると思います。

文化情報学部
分からないことだらけなのは当然ですが、早い時期から始めれば、いろいろな業界を見たり自分について考えたりする時間が十分確保できます！大いに成長できる良い期間でした。

理工学部
就活軸、人生の軸を言語化出来れば、自分の価値観と企業が結びつき、志望動機は自分の言葉として説得力のあるものになると思います。

生命医科学部
現在就職活動も早期化してきているので、できるだけ早く始めておいた方がいいと思います。

スポーツ健康科学部
いい企業に行くために採用担当の人に好かれるよう自分を偽ったり嘘を言ったりせず、やりたいことや好きなことを素直に話してみてください。素直なあなたをいいと思ってくれる企業さんが絶対にあって、そこが強みを活かして輝ける場所になると思います。

心理学部
悔いのないように頑張ってください!!自身の希望企業の体験談はよく読むと良いです！積極的にOB・OG訪問を活用しましょう！

グローバル・コミュニケーション学部
就職先を妥協せずに決めてほしい。

グローバル地域文化学部
「やりたいこと」を考えるのが難しければ、「こうだと嫌なこと」の条件を自分の中で明確にしてみると良いかもしれません。納得のいく就活になることを応援しています。

グローバル地域文化学部
就職活動は自分自身のこれまでとこれからに向き合うことができる貴重な機会なので、楽しむことが大切だと思うし、楽しんでいればそのポジティブな雰囲気が面接でも相手に伝わって、うまくいくと思います。頑張ってください。

今後開催する主な支援プログラム

こちらに掲載していないプログラムもあります。
詳細は、キャリアセンターホームページ、キャリア支援システム「e-career」、キャリアセンター掲示板、同志社大学ポータルを随時確認してください。

プログラム名	開催時期
エントリーシートワークショップ	毎月複数回開催
面接ワークショップ	毎月複数回開催
グループディスカッションワークショップ	毎月複数回開催
学内企業説明会	2027年2月1日～12日
内定者座談会	10月～11月
公務員業務説明会	11月

キャリアセンター ホームページ

「e-career」

過去に開催したセミナー・ガイダンスの動画配信画面
※動画配信を行っていないセミナーもあります。

個別相談について（対面・Web・電話）

キャリアセンターでは、経験豊かなキャリアアドバイザーやキャリアセンタースタッフが、進路や就職活動に関する悩みや疑問等の相談に対応します。相談方法は、対面・Web・電話から選択できます。相談を希望の場合は、「e-career」から予約してください。

【来年度就職を目指す皆さんへ】

納得のいく就職に向けて

来年度の就職を目指す皆さんが気になるのは、現在の社会情勢や経済動向が自分たちの就職活動にどう影響するのかだと思います。現在は、企業の採用意欲は高い傾向にあり、有効求人倍率は高水準を維持しています。一方で、多くの企業では単なる人数確保にとどまらず、将来的に中核を担う人材を見極めて採用する厳選採用の姿勢を示しています。こうした状況を背景に、企業の採用活動の早期化・長期化・多様化が進んでいます。

コロナ禍を経て就職活動を取り巻く環境が大きく変化する中で、大切なことは、「早めの準備と幅広い視点を持つ」「あきらめず粘り強く取り組む」「自分で考えて決める」の3点です。

キャリアセンターでは、様々な就職支援プログラムや個別相談を通じて皆さんの就職活動をサポートしていきます。就職活動は情報戦です。キャリアセンターを積極的に活用しましょう。次に、本学の現4年次生・大学院2年次生の就職活動の状況と、キャリアセンターが実施する現3年次生・大学院1年次生向けの就職活動支援について説明します。

現4年次生・大学院2年次生の状況について

現4年次生・大学院2年次生である2027年4月採用の就職活動は、前年と同様に、企業の採用活動のうち、広報活動が「3年次生の3月」から、選考活動が「4年次生の6月」から開始のスケジュールとなりましたが、この日程によらない企業も多数あり、採用活動は全体としてますます早期化しています。

キャリアセンターでも、このような就職活動の動きに対応するため、昨年1月、キャリアガイダンスを皮切りに、新規を含む様々な支援プログラムを開催しました。就職ガイダンス、個別相談等はオンラインでも実施し、実家や遠方にいる学生も参加できるようにしました。

また、業界・企業理解を深めるために、昨年9月に約100社が参加する企業セミナー、今年2月に約300社が参加する学内企業説明会を対面で開催しました。学内企業説明会の内容の一部はオンデマンドでも配信しました。OB・OGに参加いただいた企業も約100社あり、後輩へのアドバイス等をいただきました。

就職活動中の学生を支援するため、今年6月中旬以降、必ず選考に参加できる企業採用選考会をオンラインで開催し、併せて採用継続中の企業の求人情報を提供する等の支援を行っています。

現3年次生・大学院1年次生向けの就職支援について

就職活動の早期化・長期化、採用に直結したインターンシップが増えている現状に対応するため、キャリアガイダンスを2月に実施しました。学業の優先を前提としつつ、就職活動への早期からの準備を促し、インターンシップ参加に向けてのエントリーシート・面接対策等のセミナーを実施、学生の積極的な挑戦を後押ししました。

また、学生の活動開始時期が多様化していることから、ガイダンス、セミナー、ワークショップ等を定期的に開催し、学生が就職活動をいつから始めても対応できるように、必要な知識やスキルが身に付く体系的なパッケージを用意しています。プログラムの多くをオンラインで開催し、キャリアセンターホームページ上でオンデマンド配信も行っており、いつでも視聴できるようになっています。

就職を取り巻く環境が変化していますが、就職環境の良し悪しにかかわらず、皆さんが企業にアピールすべきことは、主に、根拠に裏付けされた皆さんの強みと企業への熱意の2点です。また、皆さんが知っている大手企業や有名企業の多くは、就職環境に関係なく、常に「厳選採用」であることを覚えておいてください。大手企業や有名企業には、全国から何千、何万人もの学生からのエントリーがありますので、全員が面接選考までたどり着くことはできません。まずは、エントリーシートで自身をアピールすることが重要です。キャリアセンターで実施するエントリーシートセミナーに参加し、自分らしいエントリーシートの書き方を身に付けてください。

企業理解を深めるプログラムを今年度は9月から開催しており、9月には合計約100社、来年2月には約200社の企業を招聘する予定です。学外で開催される合同説明会と異なり、このプログラムは、同志社大学生だけのために多くの企業が参加される点が大きな魅力です。現時点で興味がある業界・企業だけではなく、幅広い業界を見て比較し、職業選択の幅をできるだけ広げてください。

特に、皆さんが知っている企業は、一般消費者向けのビジネスを展開するBtoCの企業が多いですが、日本には、企業向けのビジネスを展開するBtoBの企業が数多くあります。知らない企業でも、ぜひ積極的に情報収集をしてください。

キャリアセンターでは、皆さんからの個別の相談にも対応しています。相談というと身構えてしまうかもしれませんが、就職活動について話を聞いてほしい、考えを整理したいので誰かと話したいといった際にも気軽に利用してください。多くの先輩たちも、就職活動の進め方や、エントリーシートの書き方等、様々な相談をしています。

就職活動では、一見すると明確な数値や基準のない中で採用・不採用が決まります。自信をもって提出したエントリーシートや履歴書が通過しない時や、手ごたえがあった面接が不合格だった時は、自分自身を否定されたような気持ちになるかもしれません。落ち込んだ時は、一人で悩まずにキャリアセンターを大いに頼ってください。

企業の求める人材

経団連が実施したアンケート(「採用と大学改革への期待に関するアンケート結果」2022年1月18日)によると、企業が新卒採用時に期待する資質の1位は、「主体性」です。2位以下には、「チームワーク・リーダーシップ・協調性」、「実行力」が続きます。企業が新卒の学生に求める力は、「自ら主体的に行動し、周囲を巻き込みながら、実行する力」と集約できるでしょう。

オンラインによるコミュニケーションは、直接対面で話すのとは異なる難しさがあります。これまで以上に相手の意見を傾聴し、そのうえで自分の意見を伝えることが重要です。オンライン面接では、通信が途中で途切れてしまう、音声が聞きづらい、カメラが機能しない等、様々な問題が起こり、面接の緊張感が加わって、対応に困った学生もいました。トラブルを未然に防ぎ、万が一トラブルが起こった時にも落ち着いて対応できるよう、事前にPC操作に習熟しておく等の準備をしておいてください。

また、リモートワークが増えたことで、職場で仕事をしている時よりも仕事の全体像が見えにくい状態にあります。指示を待つだけの受動的な姿勢では、業務に支障が生じることがあります。これからの社会人は、これまで以上に主体的に課題を発見して、対策を考え、解決に向け挑戦し、業務を遂行する力が求められます。

最後に

採用選考の過程では、学生時代に力を注いだエピソードを通じて、皆さんがどのような状況でどのように考え、どのように行動したのかが問われます。

大切なのは、何らかの目標を達成したという結果ではありません。目標を達成するまでにどのような努力をしたのかというプロセスを具体的かつ明確に伝えることが重要です。プロセスの中に、皆さんの強み、人間性、価値観、能力等が表れるからです。

「早めの準備と幅広い視点を持つ」「あきらめず粘り強く取り組む」「自分で考えて決める」の3点を意識しながら、自分を信じて前向きに就職活動に取り組んでください。

同志社校友会

Doshisha Alumni Association

INFORMATION 2

2026 November

同志社校友会は、1885年に「アルムニ会」として発足し、今年で創設141年を迎えます。主な目的は、卒業生の親睦と母校の発展への寄与であり、近年は大学との連携を通じた学生の支援にも力を入れています。現在、会員数は約38万人となり、国内外で多くの卒業生が活躍しておられます。



同志社校友会 会長 **松岡 敬**

TOPIC

コロナ禍において、経済的に困窮していた学生のため様々な支援を行ってきました。

2023年度からは、経済支援からコロナ禍以前の「栄養バランスの取れた食事」への支援に戻し、補食として小鉢を提供しました。

2024年度からは「100円朝食」の支援を通じて、学生の皆さんが規則正しく、充実した学生生活を送ることができるよう支援をしています。

他にも奨学金の支給などを実施しています。

今後も学生に寄り添った支援を実施していく予定です。



Check!



同志社校友会 活動の概要

1 卒業生とつながる

2026年9月現在、国内に48の支部、海外に36の支部があり、校友会本部と連携しながら活動を行っています。「地元へ戻りたい」「転勤により慣れない土地で生活をするのが大変」「海外での勤務は家族も心配している」など、卒業生が抱える課題に対して、現地の支部がサポートをしています。

詳しくは
同志社校友会
ホームページへ

2 大学とつながる

同志社大学および各地の卒業生と連携し、学生へのサポート活動を行っています。独自のキャンパスツアーや、Uターン就職を後押しする学生と卒業生の交流会、同志社フェアなどのイベントを通じて大学のプレゼンス向上のための活動を行っています。

3 学生を支える

「同志社校友会奨学金」「同志社スポーツ奨学金」、海外への留学支援として「グローバル人材育成奨学金」など給付型の奨学金を通じて学業と学生生活の充実がはかれるサポートを行っています。それ以外にも、学生生活のサポートとして食支援などに力を入れています。

同志社校友会本部事務局
E-mail：info00@doshisha-alumni.org

クリスマス・イルミネーション点灯式




2025年度の様子

アドベントを前に各地でクリスマス・イルミネーションが灯り始めるころ、同志社大学でも点灯式を催しています。

京都の冬の風物詩として広く親しまれている今出川校地の点灯式では、西門を入って北側に広がる彰栄館・同志社礼拝堂・良心館に囲まれたサンクタスコートのヒマラヤスギに約16,000個のLED電球が灯ります。

京田辺校地では、3代目となる2019年に植えられたヒマラヤスギに約6,500個のLED電球が灯ります。正門を入ってすぐの同志社ローム記念館前にあるため学外からも望むことができ、キャンパスのシンボルとなっています。

今出川校地	京田辺校地
11月20日(金) 17:15～(予定) 西門北側サンクタスコート ヒマラヤスギ周辺	11月30日(月) 16:45～(予定) 同志社ローム記念館前

※都合により、変更になる場合があります。

同志社大学×京田辺市 ふるさと納税スタート



京田辺市へのふるさと納税を通じて、本学の学生をご支援いただける仕組みが始まりました。皆様からのご寄附は、学生の活動や地域の発展など、以下の事業に活用させていただきます。

- ■ 地域と大学・学生との連携交流に資する事業
- ■ 地域の産業・観光・経済の活性化に資する事業
- ■ 歴史・文化・伝統の保護に資する事業
- ■ 地域での就職を促進する事業
- ■ 地域の課題解決・環境整備に資する事業

学生たちの「志」が未来を切り拓く力となるよう、皆様の温かいご支援をよろしくお願いいたします。

詳しくはこちら

第151回 同志社EVE 「Page151～一人ひとりの想いがここで交わる～」

同志社EVEは、同志社の創立記念日(11月29日)を祝う記念行事です。昨年度、同志社は創立150周年という節目を迎え、今年度は151年目の新たな一歩を踏み出します。

第151回となる今年度は、今出川校地にて11月26日(木)・11月27日(金)・11月28日(土)の3日間にわたり開催いたします。

同志社EVEの理念である「学生の自主管理・自主運営」と「団体の活動の発露の場」を実現するため、学生団体であるEVE実行委員会が主体となり、準備・運営を進めています。

これまで培われてきた同志社EVEの伝統や活気、学生団体による課外活動の成果発表、大学が持つ教育・研究機関としてのリソース、そして上京区を中心とした京都市の魅力を、キャンパス内にとどまらず、地域コミュニティにも展開することで、学生・教職員・地域が一体となった一大行事となることを目指します。

今年度のテーマは「Page151～一人ひとりの想いがここで交わる～」です。このテーマには、同志社EVEの歴史を一冊の本と見立て、その「151ページ目」として、関わるすべての人たちと創り上げたいという実行委員会の想いが込められています。また、この151ページが、それぞれの想いを持った人々が集い、新たなつながりが生まれる場となることを願い「一人ひとりの想いがここで交わる」というサブテーマを掲げました。

当日は、ステージパフォーマンスや団体活動を体験できるワークショップ、模擬店、教室展示など、多彩な学生企画が満載です。また、京都の伝統工芸品ワークショップや近隣飲食店による本格屋台、上京マルシェなどの地域と連携した企画も多数予定しています。

当日のご来場を、今出川校地でお待ちしております。

Page151
一人ひとりの想いがここで交わる

第151回
同志社EVE公式HP
https://doshisha-eve.com/

［ ゼミで学ぶ 魅力を語る ］

幅広い領域の専攻から数多くのゼミがある本学。
それぞれ、どんなことを学んでいるのか。
ゼミ教員が、個性豊かなゼミの魅力を語ります。

環境問題や地域課題に向き合うことは、社会との関わり方を考えること



政策学部
准教授

小谷（こたに） 真理（まり） ゼミ

Mari KOTANI

環境問題や地域課題を考えることは、社会の一員として自らの役割を問い直すことでもあります。ゼミでは、環境法政策とまちづくりをテーマに、課題の分析だけでなく、その解決に向けた提案や実践を重視しています。

私たちが直面する環境問題や地域課題は、一人ひとりの生活や行動、企業活動、地域社会の営みの積み重ねの結果であり、だからこそ、多様な主体の参加が不可欠です。

政策学とは、課題を理解するだけでなく、その背景を読み解き、解決策を構想し、実践し、その成果を検証する学問です。こうした力を培うため、ゼミでは現場で学ぶことを大切にしています。

自治体や企業、地域住民との対話やフィールドワークを通じて、多様な立場や価値観に触れ、文献やデータだけでは見えてこない現実を踏まえて課題を立体的に理解します。国内外でフィールドワークを行い、調査等を基に地域プロジェクトを企画し、補助金への応募やコンペへの挑戦、事業実践にも取り組んでいます。

課題を知るだけでなく、提案し、行動し、結果を振り返る。こうした経験により、社会の一員として公共的な課題に向き合い、多様な人々と協働しながら解決に取り組む姿勢を養います。自ら考え行動し、より良い社会づくりに主体的に関わろうとする意識が育まれることも、本ゼミの大きな価値だと考えています。



トロント市役所訪問


衣類ロス削減ワークショップの様子

「会話」からコミュニケーションの仕組みを解き明かす——エスノメソドロジー・会話分析ゼミ



グローバル地域文化学部
准教授

石野（いしの） 未架（みか） ゼミ

Mika ISHINO

本ゼミのテーマは、社会学から生まれた「エスノメソドロジー・会話分析」の手法を用いて、人と人とのコミュニケーションがいかにして成り立っているのかを解明することです。

［3年次演習］ガーフィンケルのエスノメソドロジーやゴフマンの相互行為社会学を中心に、コミュニケーションに関わる社会学の文献を講読し、理論的な理解を深めます。あわせて会話分析の手法を学び、分析練習と議論を重ねます。

［4年次演習］卒業論文の執筆に向けて、各自の関心に基づきテーマを設定し、データの分析を進めながら研究を深化させます。

ゼミでは、実際の会話をビデオ録画したデータを繰り返し観察し書き起こす作業を通して、発話の内容だけでなく視線や身振り、姿勢といった非言語的な資源にも着目し、会話現象について自分なりの分析・記述ができるようになることを目指しています。

本ゼミの特徴は、教室での友人同士のやりとりや買い物場面、外国語学習場面など、身近な場面の「会話」を手がかりに、そこに成り立つ規範や権力性を実証的に明らかにする点にあります。学生の皆さんには、当たり前に見える日常のやりとりを丁寧に観察し記述する姿勢と、関心のあるテーマについて専門書を自ら読み進める主体的な学びの姿勢を、特に身につけてほしいと考えています。


ゼミ集合写真

learning objects of

Seminars

瞬間を切り取る超高速分光



理工学部
教授

鈴木（すずき） 将之（まさゆき） ゼミ

Masayuki SUZUKI

我々の研究室では、モード同期ファイバレーザーの開発とそれを用いた分光の研究を行っています。モード同期という技術を用いると時間幅が100フェムト秒（10のマイナス15乗秒）程度の光パルスを1秒間に30万本程度生成することができます。ちなみに100フェムト秒という時間は光が30ミクロンしか進まない非常に短い時間です。この短い時間で起こる現象を可視化するために時間伸長分光というリアルタイムのスペクトル計測法の開発にも取り組んでいます。モード同期レーザーを光源として時間伸長分光法を用いると1秒間に30万本の膨大なスペクトルデータを取得することができます。この分光法を用いた生体分光への応用を進めていきたいと考えています。

ゼミに配属された学生には、モード同期ファイバレーザーを自分で作ってもらっています。苦労の末にモード同期した波形がオシロスコープ上に現れた瞬間の「やった！」という感覚を味わってもらうことで、ものづくりの達成感を実感してもらえるように指導を行っています。

ゼミ生の声

研究を始めた当初は、レーザーや光ファイバについて分からないことも多く、実験装置の調整や光の結合に苦労しました。研究を続けていくうちに、自分で光学系を組み、条件を変えながら実験する中で、講義で学んだ知識が実際の現象につながっていく面白さを感じました。特に、メンバーや先生方と議論しながら試行錯誤を重ね、初めて完全なモード同期の波形を確認できた瞬間には、大きな達成感がありました。

ままならぬもの、それは「家族」。だからこそ



心理学部
教授

興津（おきつ） 真理子（まりこ） ゼミ

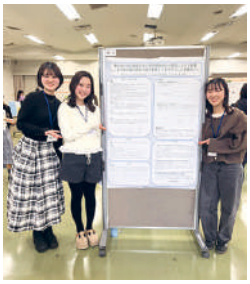
Mariko OKITSU

本ゼミのテーマは家族臨床心理学です。個人のこころや行動を、その人を取り巻く家族関係や、本人の中に形成された家族イメージとの関連から捉えます。親子・夫婦・きょうだい関係、家族機能、喪失や悲嘆などを題材に、家族関係がパーソナリティや対人関係に及ぼす影響、また関係がどのように変化しうるかを研究しています。3年次演習では、関心のあるテーマに関する英語論文を読み、発表と討論を行ったうえで、数名のグループで研究計画を立てます。4年次演習では、そのグループで卒業研究を進めます。同志社心理では「基礎と応用」の両輪を大切にすることがモットーとなっています。その4年間の学びの集大成として卒業論文を執筆し、1月には試問会、ポスター発表に取り組みます。

このゼミには、家族という身近な存在の「ままならなさ」を、よく知っている人たちが集っていると思います。だからこそ、自らの問いに対して、手ごたえのある答えが得られたと思える研究になるよう願いつつ指導を行っています。

ゼミ生の声（菅原小鈴さん）

私のグループでは、「愛着と援助要請の関連」をテーマに質問紙調査を行っています。得られた結果の解釈に頭を抱えることもありますが、メンバー同士であれこれ意見を交わしながら、自分たちなりの捉え方を探っています。先生が学生自身の考えを尊重してくださるので、安心して試行錯誤できるゼミです。



ポスター発表

2026 November

本学教員の執筆図書紹介

（価格は税込み）

貧困研究ブックガイド
畑本裕介 他著 明石書店 3,520円

商品と社会 ②
川満直樹 編 川満直樹 他著
同文舘出版 3,300円

民事執行・民事保全法 第3版
中西正 他著 有斐閣 3,520円

日本の活断層総覧
堤浩之 他編著 東京大学出版会
59,400円

小村雪岱デザイン大鑑
西川貴子 他著 国書刊行会
5,940円

国際法で世界がわかる 新版
新井京 他著 岩波書店 3,300円

公認心理師の職責
興津真理子 他著 ミネルヴァ書房
2,420円

現代東南アジア政治
小山田英治 他著 法律文化社
2,970円

共に生きるための国際文化学
崔紗華 他著 昭和堂 2,970円

日本高等教育の課題と挑戦
山田礼子 他編著 東信堂 4,290円

リトルトーキョーは語る
南川文里 著 名古屋大学出版会
5,940円

占領期日本の教育再建と越境キリスト教
吉田亮 編 吉田亮 物部ひろみ 他著
教文館 7,480円

社会福祉学習双書 2026 第9巻 ソーシャルワークの基盤と専門職
空閑浩人 他編著
全国社会福祉協議会 2,420円

社会福祉学習双書 2026 第10巻 ソーシャルワークの理論と方法
空閑浩人 他編
全国社会福祉協議会 2,860円

Local Governance in Japan
野田遊 編 野田遊 安達晃史
太田原準 瓜生原葉子 他著 Springer

Comparative Governance Reforms: Assessing the Past and Exploring the Future
野田遊 他著 Springer

中東ユーラシアから世界を読む
中西久枝 他著 岩波書店 3,080円

弥生後期社会の実像
若林邦彦 他著 六一書房 6,600円

職場・学校のセクハラ・パワハラ
吉川英一郎 著 文眞堂 1,430円

中小企業・ベンチャー企業論 第3版
関智宏 他著 有斐閣 2,640円

「日本式介護」の中国進出
郭芳 著 明石書店 3,520円

金融商品取引法への誘い 第2版
川口恭弘 著 有斐閣 2,090円

国際私法
髙杉直 他編著 勁草書房 2,970円

幻想と怪奇の英文学V 関西疾風編
下楠昌哉 他責任編集 西川貴子
下楠昌哉 円浄ゆり 金津和美 斎藤彩世
金谷益道 他著 春風社 3,300円

『存在の彼方へ』を解読する
服部敬弘 他著 法政大学出版局
6,930円

エスニック・マイノリティの社会学
南川文里 他著 有斐閣 2,750円

岐路に立つドイツの「過去の克服」
三牧聖子 他著 大月書店 2,970円

クィアな時間と場所で
菅野優香 他訳 花伝社 4,180円

マーケティング・リサーチをはじめる
石田大典 他著 有斐閣 2,750円

歴史地理学事典
佐野静代 他著 丸善出版 26,400円

テレビ・ドキュメンタリーの孤高
小黒純 他編著 人文書院 6,820円

歴史は“強者ファースト”か?
板垣竜太 他編著 岩波書店 836円

動物の行動と心の事典
畑敏道 他著
朝倉書店 15,400円

理論生物学事典
阿部真人 他著 朝倉書店
15,400円

国際法の理論と実現
浅田正彦 他著 信山社 18,480円

近代啓蒙の黎明期
李長波 他著 三省堂 4,180円

天使の哲学
石田隆太 著 慶應義塾大学出版会
2,640円

水インフラの事典
赤尾聡史 他著 丸善出版
38,500円

アートとエージェンシー
渡辺文 他訳 水声社 5,500円

激動する世界と憲法学
戸田舜樹 他著 敬文堂 3,300円

和歌が生まれるとき
大山和哉 著 勉誠社 12,100円

保険法 第5版
洲崎博史 他著 有斐閣 2,530円

ポルタリス 歴史を貫く精神
深谷格 訳 法政大学出版局
9,900円

無党派層の研究
飯田健 他著 有斐閣 4,510円

刑法総論判例50! 第2版
十河太朗 他著 有斐閣 1,980円

人はなぜ他者を差別するのか
朴蕙彬 他著 論創社 2,200円

こども家庭福祉
小野セレスタ摩耶 他編著
法律文化社 2,750円

事例で学ぶマーケティング・リサーチ
多田実 他著 オーム社 2,970円

TAKING CARE 看護の知が社会を変える
山下麻衣 他訳 医学書院 3,300円

中国鉄鋼業
銀迪 著 文眞堂 4,400円

模範六法 2026
村中孝史 他編 三省堂 7,260 円

人口減少下のインフラ整備・管理と財政
田中宏樹 他編 日本財政学会
5,500円

現代中国という問い
村田雄二郎 著 晃洋書房 7,040円

ここまでわかった京都の歴史
井上一稔 鍛治宏介 小林丈広 他著
文学通信 1,815円

同志社物語
木原活信 和田喜彦 小原克博 他著
同志社大学良心学研究センター

国際社会の紛争解決学
富樫耕介 他編著 法律文化社
3,520円

ブラック・ウイメンズ・カルチャー
臼井雅美 著 明石書店 4,180円

法哲学という企て
濱真一郎 他著 信山社 16,500円

臨床行動分析を実践する
武藤崇 他監訳 武藤崇 他訳
星和書店 3,960円

スポーツ政策学
真山達志 他編著 庄子博人 他著
成文堂 4,620円

同志社人訪問

Interview with Doshisha People

映画やドラマの企画を立案し、作品を世に送り出すプロデューサー。ミリアゴンスタジオの村田千恵子さんは、文学部の卒業生です。卒業と同時に渡米して映画製作を学び、帰国後は数々の話題作を手掛けてきました。歌舞伎の世界を描いた映画『国宝』も、村田さんの企画・プロデュースから生まれています。作品を観客に届ける仕事の中身から、映画館で働いた学生時代まで、同じく映画の道を志す、同志社映画サークルF.B.I.会長の今井杏奈さんが迫りました。

「自分のお金で映画を撮るな」アメリカで学んだ映画の作法

今井：本日はよろしくお願いします。実は私の母は、京都で『国宝』のエキストラに参加していたんです。

村田：そうだったんですね。拘束時間が長くて大変だったのでは？

今井：それが、何度も足を運んで楽しんでいました。歌舞伎の場面を間近で見られたのが、嬉しかったようです。

村田：京都では、本当にたくさんの方に集まっていただきました。

今井：私もサークルで映画を制作しています。村田さんが映画の仕事を志したのは、いつ頃ですか。

村田：高校生の頃から考えていましたが、大学生の時に『リアリティ・バイツ』（1994年）という映画を観て、こういう映画を作ってみたいと思うようになりました。ちょうど、アメリカでインディペンデント映画が次々と作られている時代でした。当時は日本映画よりアメリカ映画をよく観ていました。



Interviewer　文学部哲学科 3年次生

今井 杏奈（いまい あんな）さん

京都府出身。同志社映画サークルF.B.I.の会長を務め、学内で映画の制作に取り組む。卒業後の進路も、映画関係の仕事を志望している。監督作『ここがわたしのすべて』では、人生が彩られるという期待を失った主人公が、自分だけの世界を模索する姿を描いた。

今回の同志社人　株式会社ミリアゴンスタジオ 執行役員

村田 千恵子（むらた ちえこ）さん

大阪府出身。同志社大学文学部卒業後、カリフォルニア州立大学で映画製作を学ぶ。サンダンス・インスティテュートで若手映像作家の育成に携わったのち帰国し、映画・テレビの製作会社でプロデューサーを務める。2023年のミリアゴンスタジオ設立とともに現職に就任。『キングダム』（2019年）、『国宝』（2025年）などを企画・プロデュースした。



今井：同志社大学では新聞学を専攻されていたんですよね。

村田：当時の日本には、映画を学術的に学べる大学がありませんでした。そこでジャーナリズムを学ぼうと思いました。ゼミは報道犯罪でした。間違った情報を発信すれば、受け取った人は信じてしまう。マスコミはそれ自体が権力なのだ――そう教わりました。映画もメディアですから、大学時代の学びは、今も残っています。学外では、大阪の映画館でアルバイトをしていました。1日7時間のフルシフトで。

今井：フルシフト！よく働いて、そしてよく観ていらしたんですね。

村田：ええ。たくさん稼がせていただいて、たくさん観させてもらいました（笑）。

今井：そして同志社大学卒業と同時に映画を学ぶために渡米されたと聞きました。

村田：脚本、演出、撮影、編集に加えて、映画の理論や各国の映画史、評論まで学べる場所は、当時はアメリカにしかありませんでした。驚いたのは、最初の授業で「自分のお金で映画を撮るな」と言われたことです。自費で作り続けるのは、サステナブルではないと。自分のお金がなくなれば、映画を作れなくなってしまいますからね。

今井：では、制作費はどうするのですか。

村田：学校が出してくれました。ただし、無条件ではありません。「この脚本を、このスタッフで、この期間に、この制作費で撮ります」と、企画書と予算表を提出して交渉するんです。作品を作るだけでなく、実現するための計画を立て、人を説得することを学びました。

映画作りは、マンション建築に似ている

今井：そうした学びの中で、なぜプロデューサーを目指すようになったのでしょうか。

村田：アメリカで一通り学ぶうちに、英語がネイティブではないので、脚本はうまく書けない、演出も自分には才能がないと気付かされました。それでも、映画館でアルバイトをしていたこともあって、映画をビジネスとして扱うことに興味がありました。最初は配給などのビジネスを考えていたのですが、縁あって製作に携わるようになりました。

今井：映画のプロデューサーとは、どのようなお仕事なのでしょうか。

村田：人によって仕事の内容が全く違います。私は、この原作を映画にしようとゼロからイチを思いつくタイプではありません。監督や脚本家など、人から相談されたものを肉付けしていく形が多いです。「この原作、面白いですよね」と言われて「知りません」では困るわけです。本を読み、新聞を読み、映画を観て、常に情報を持っておくことが私の仕事の土台になっています。



『キングダム』『国宝』で受けた藤本賞（左2つ）と2026年エランドールプロデューサー賞。いずれも村田さん個人に贈られたもの

今井：私にはまだ、具体的なイメージが持ちにくい仕事です。

村田：マンションを建てるのに似ていると思います。「ここなら必ず売れる」という土地を選び、有名な建築家に頼んで内装にこだわるのか、立地だけで売れるのだからコストを抑えて仕上げるのか。そこに、作る人の志が出ます。映画も同じで、その判断を委ねられるのがプロデューサーです。

今井：『国宝』の場合は、どのような判断をされたのですか。

村田：私自身が歌舞伎が好きで観ていたので、日常的に歌舞伎を観る人が決して多くないことは分かっていました。多くの日本人は、一生に一度も歌舞伎を観ないかもしれません。敷居の高い芸術だと思われていますが、歌舞伎という名称は誰もが知っています。そうであれば、映画館でなら観たいという人がいるのではないかと考えました。きちんとしたものを作れば、観客は来てくださるはずだ、と。



今井：母が、まさにそうでした。

村田：嬉しいですね。ただ、ここまで多くの方に来ていただけるとは予想していませんでした。

必要なのは、センスより目利き

今井：私が好きになる作品は、あまり有名ではないものが多いんです。「こんなに面白いのに、どうしてみんな観ないんだろう」と思ってしまいます。

村田：その気持ちは分かります。でも、「誰も食べてくれないおいしい料理は、本当においしい料理と言えるのか」とも考えられますよね。

今井：作品の良さだけではなく、みんなが観るようになるための仕掛けも必要だということでしょうか。

村田：そうですね、宣伝もその一つです。

今井：仕掛けまで考えるとなると、かなり難しそうです。映画の仕事をするうえで、どのような力が求められるのでしょうか。

村田：「目利き」の力だと思います。例えばセンスは生まれ持ったものという印象がありますが、目利きは経験で鍛えられます。漁師さんが網を下ろす場所を決められるのは、何年も海に出て、この気候でこの水温ならこの辺りだろうと分かるようになるからですよね。以前、絵を描くことを生業としている方に言われました。「あなたの仕事は難易度が高いけれど、年を取るほど簡単になるはずだ。同僚や信頼できる人が増え、データもノウハウも蓄積されていくから」。映画会社に入っても、最初の勤務地は映画館かもしれませんし、最初に任される仕事は営業かもしれない。それをやりながら蓄積していくことが、大事なのだと思います。

今井：映画に関わるには、やはり映画会社に入るのが近道なのでしょうか。

村田：私は、映画をやりたい人には出版社をよく勧めます。最近の日本映画では原作のない映画は少なくなっています。物語がゼロから生まれる場所は、実は出版社であることが多いのです。物語が好きなら、有力な道だと思います。

今井：映画会社だけが入り口ではないのですね。最後に、村田さんがこれから挑戦したいことを教えてください。

村田：これまでと同じように、才能のある人を見つけて、その才能が開花するように環境を整えることです。俳優も監督も脚本家も「この題材だからこそ輝いた」ということが必ずある。そうした才能と題材が出合う場を、これからも用意し続けたいと思っています。



村田さんが企画・プロデュースを手がけた映画『国宝』。歌舞伎役者の半生を描いた本作は、2025年6月の公開から半年を超えるロングランとなり、実写の日本映画として歴代最高の興行収入を記録した。

Blu-ray&DVDの詳細については、こちらからご確認ください。

取材を終えて

Interviewer
今井 杏奈さん



「プロデューサー」という言葉は何度も耳にしていましたが、実際にどのような仕事をされているのか詳しく知らなかったため、大変勉強になりました。作品への熱い想いだけでなく、資金面や発信者としての影響力なども含めて全体を統括するプロデューサーならではの視点を知り、これまでのイメージが一変しました。また、村田さんご自身のこれまでの歩みを伺い、私自身もこれからの挑戦に向けて大きな勇気をいただきました。一つの作品をつくり上げるまでの苦労や情熱を知り、改めて映画というエンターテインメントの奥深さと凄みを感じました。

2026年11月(4・7・11月年3回)発行 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
発行 同志社大学 学長室総合企画部広報課
TEL:075-251-3120
E-mail:ji-koho@mail.doshisha.ac.jp

Portraits of challengers

My Purpose 挑戦する人

上野(うえの) 結来(ゆうき)さん(左)
スポーツ健康科学部 4年次生
長崎県、大村工業高校出身。小学生の頃に所属していたチームの監督に勧められてキャッチャーに。

高橋(たかはし) 理央(りお)さん(右)
商学部 4年次生
神奈川県、光明学園相模原高校出身。兄の影響でソフトボールを始める。

インタビュー動画もチェック



「対戦相手から世界一のバッテリーへ」

勝利は楽しんだ先にある。

〝投げた〟と思った次の瞬間には、鋭い音を立ててボールがミットに収まっている。まばたきをする時間もないほど、一瞬だ。練習場で高橋さんの投球を目の当たりにして、速さと鋭さに息をのむ。このスピード感こそ、ソフトボールの醍醐味だ。

ピッチャーの高橋さんは神奈川県、キャッチャーの上野さんは長崎県の出身で、ともに小学生からソフトボールを始めた。中学では軟式野球部に入り、高校でソフトボールの道へ戻ってきたのも同じだ。高校時代には、インターハイ準々決勝で対戦したこともある2人が、大学で思わぬ再会を果たし、バッテリーとなった。それから4年。春季リーグ戦での1部昇格を経て、2024年にはインカレで準優勝するなど、チームの主力として、全国の舞台で戦ってきた。

「どんなボールでも、結来ならしっかり受けてくれる。だから、勝負どころでも低めギリギリを思い切って狙えます」

「理央はライズもドロップもキレがあって、コントロールも良い。隙のない投手です」

ライズは浮き上がるように伸び、ドロップは打者の手元で鋭く落ちる。対照的な変化球を高橋さんが投げ分け、上野さんがその一球一球を受け止める。交わされる言葉は少なくても、互いの意図は伝わる。積み重ねてきた時間が、一球ごとの判断を支えている。

その信頼は、世界の舞台でも実を結ぶ。今年4月から5月にかけてコロンビアで開催された「WBSC第2回男子U23ワールドカップ」では、そろって日本代表に選出された。上野さんは正捕手としてチームを支え、高橋さんも多くの試合に登板した。決勝でも2人がバッテリーを組み、大会中に一度敗れた前回王者オーストラリアと再び対戦。日本は4対2で雪辱を果たし、U23カテゴリーで初の世界一に輝いた。

世界の頂点を知る2人は、勝利にこだわり、厳しい姿勢でチームを率いているのだろう。そう思いながら、キャプテンでもある上野さんに同志社大学のチーム方針を尋ねると、返ってきたのは意外な言葉だった。

「まずは、楽しむことです」

部員のおよそ半数は、硬式野球部の出身だという。だからこそ、「まずソフトボールという競技の面白さを知ってほしい」と上野さんは話す。「とにかく楽しむ。それで勝てたら、なお良いという感じです」と、高橋さんも笑顔で続ける。

卒業後は、高橋さんは就職先のチームで、上野さんはクラブチームで競技を続ける予定だという。同志社大学で相棒となった2人が再び対戦することもあるかもしれない。そして、次の世界大会ではまた、2人のバッテリーが見られるはずだ。



↑「WBSC第2回男子U23ワールドカップ」で初優勝。高橋さんは大会のMVPに選ばれた